

■トウモロコシ

前号でお伝えした収穫が無事終わりました。微細断収穫機→トラクタ+トレーラー→コンビラップの体系です。今年は、7月の日照が多く、例年よりも少し早く出穂したようです。また、雨が少なかったためと思われますが、雌穂(子実)が細いようでした。さらに、例年に比べて猪の動きが活発で、電気柵や金網柵を越えて侵入し始めたことから、少し早い段階で収穫しました。そのような状況下で結果的に茎葉の水分が多かったため、トウモロコシサイレージ用の乳酸菌を添加しました。フィルムが破れなければ、かなり良いコーンサイレージができるはずです。



(微細断収穫機)

■イタリアン

10月はイタリアンライグラスの作付を行う方が多いと思います。畜技では17haで作付を予定しており、9月下旬から除草剤(強毒雑草対策,グリホサート系)散布後に耕起を始めて、10月中旬までにはすべての播種を終えるよう計画しています。

皆さんは、イタリアンの栽培目標をどのように定めていますでしょうか?一般的に重視することは収量ですが、私の知っている畜産農家の方々(和牛の方もいらっしゃいます)は、それほど多収を狙っているようには見えません。長年の経験をもとに、無理なく作業し易いように作っている印象があります。

畜技では、肥料と種子のコストを考慮しつつ、多収(聞こえ良く言えば、ローリスクハイリターン)を狙っています。収量を左右する技術は、窒素量>種子量>播種時期>播種後の鎮圧だと感じています。

畜技では肥料は標準的な量を施肥していますが(表1)、今年の春は、草丈150cm超で倒伏するほどの良い出来でした。(それでも、カタログに記載されているほどの収量には届きません。)倒伏は種子量にも左右されますが、畜技では標準の種子量(3kg/10a)で栽培しているので、この倒伏の主因は、3月の好天(日照が長く、高温)で例年以上に生育が良く、稈長が伸びすぎたことではないかと考えています。あれほどの好天になるならば、3月初めの追肥を抑えれば良かったと思いましたが、読み切れない天候をどのように勘案するか、ここが経営判断であり、結果としてベストではなかったと思っています。

表1 施肥量 (単位:kg/10a)

	窒素	リン酸	カリ
基肥 (堆肥含む)	8	8	8
追肥 (3月)	8	4	8
合計	16	12	16

実際の量は目標収量に応じて変えます
使用資材は、牛堆肥、鶏ふんペレット、硫酸などです
施肥量の例は7月号に掲載しています

多収を目指すか否かについては、乾草利用の場合には熟慮が必要です。多収になると乾燥作業に長い日数が掛かり、結果的に良い乾草を作ることが難しくなるリスクがあります。

播種時期は、11月では早霜に遭う危険があるので、10月が必須です。逆に、早い時期(9月)に播けば、いもち病に掛かるリスクがあります。(いもち病:カビが原因、平均気温20℃以上で発生し易い)

■飼料稲

6月から8月の日照時間が長かったので、多収になると予想しています。多収になれば、粗(消化が悪い)が少なくなり、糖(乳酸菌のエサ)は多くなります。

よって、来年に給与する稲WCSの品質はより良くなるだろうと期待しています。

現在、県内栽培の9割以上が「たちすずか」ですが、この品種は縞葉枯(しまはがれ)病に弱いため、関東地方では「つきすずか」への品種転換が始まっています。「つきすずか」は「たちすずか」の子にあたり、縞葉枯病に強いだけでなく、わずかですが粗がより少なく、草丈がより高いといった特徴があります。広酪と畜技では、集落法人の協力を得て、庄原市内で実際に栽培してもらっています。また、三次市と府中市の法人では採種にも取り組んでおり、来年はまとまった面積での栽培が可能になる見込みで、年末までに関係の方々とは作付計画を相談させていただきます。



(写真の左から220号、つきすずか、たちすずか、中生新千本、コシヒカリ)

■暑熱

この号が届く頃には、昼間も過ごし易くなっていると思いますが、牛の受けた暑熱ストレスは秋口になって出てくるものもあります。来年の夏対策は今から春までに考えて、5月には具体的に行動してください。畜技からも、有効な対策を来春にご案内しますので参考にしてください。

内容に関するお問い合わせは、畜技センター技術支援部へご連絡ください。(電話 0824-74-0332)